

輪廻転生 1989年 人文書院

J·L·ホイットン

トロント大学医学部精神科主任教授

J·フィッシャー

トロント・サン紙の記者を経て著述活動に専念

永遠の生命

『いまわのきわに見る死の世界』の著者、ケネス・リング博士は、「死の初期段階で何が起きるのか……これはいまだに結論の出せない問題である」と、近似死体験の不完全さを表明している。

本書ではこの問題に直接とりくみ、催眠下で死の奥地へと深く分け入る旅をしたホイットン博士の被験者たちの証言にもとづいて、前人未到の地——この世の人間には知られていない世界——に光をあてていく。深いトランス状態からもたらされたメッセージが伝えるのは、死後の生は生まれる前の生と同じであり、私たちはほとんど誰もが、肉体をもたない魂としてこの別の世界に何度も住んだことがある、ということである。私たちは、無意識の上では、この世について知っているのと同じくらい、あの世のことをよく知っている。次の世界とは、生まれるために後にしてきた状態であり、死ねばまた戻っていく状態もある。輪廻はめぐり、誕生と死とが交互に生じ、個人は成長をとげていくのだ。本書の題名(原題はLife Between Life)はそんなわけでつけられた——死とは、ある段階とその次の段階とを区別する境目にすぎない。まぎれもなく、生と生との間にも生は存在するのだ。

ホイットン博士の被験者たちは、その当初の輪廻転生に対する偏見の有無が各人各様に異なっていたように、宗教的素養もさまざまだったが、みな同じように、私たちをめぐる進化の過程にとって生まれ変わりはその根本にかかわることがらだ、と証言している。被験者たちが語るには、死ぬと魂は肉体を離れ、時間も空間もない状態に入っていくという。そこで、いましがた終わった地上での生活がどうであったかが検討され、カルマ(業)の必要に応じてつぎの転生が計画される。たとえば前世の自分の行為がもとで姉を自殺に追い込んだある被験者の場合だと、その借りを返すためにまた彼女の弟として生まれてくることを選びとる、という具合に。

ホイットン博士の行なっている、死んでから生まれ変わるまでのあいだ、すなわち中間世の状態の研究は、催眠を使った前世の調査研究から自然に発展していったものだが、博士の研究によって、この高次の自己についての私たちの知識はさらに増加した。くり返し被験者に催眠をかけて、いちど転生してからつぎに転生するまでのあいだの間隙へとみちびいていくうち、ホイットン博士は中間世の人間の意識が、今生での過去に退行したり前世に退行したりしているあいだに経験する意識より、はるかに高い程度に達することを知った。この意識は、私たちの現世にとらわれたリアリティーという概念をはるかに越えるもので人生を別の角度から眺めることを可能にしてくれる。中間世の状態では、俗にいう「善惡の判断力」が拡大して、心のイメージ

すべてを見とおす力がさずけられるため、人間存在の意味と目的をはっきりと理解できるようになる。ホイットン博士はこの並はずれた知覚状態を「超意識(メタコンシャスネス)」と名づけている。

では、超意識とは、他の知覚のレベルとくらべてみるとどう違うだろうか。仮に意識を次のようにグループ分けしてみると、この特殊な状態がいかに他をしのぐものかということが分かりやすくなるだろう。まずははじめの段階を「解離意識」と名づけておこう。

解離意識 (Dissociative Consciousness) 眠っているかまたは覚めている意識が分かれて、ふたつもしくはそれ以上の経験の流れが存在している状態。この状態にある人はたいてい、いちどきに一方の流れにしか気づかない。夢、幻想、既視感(デジャヴュ)、多重人格、前世の記憶、体外離脱体験などがこれにあたる。それよりもう少し精妙なものが、次の「情緒的意識」である。

情緒的意識 (Affective Consciousness) 必ずしも言葉では言い表わせない主観的な状態——視覚的ないしは感情的な状態、もしくはその両方——を意識していること。愛や憎しみなどの感情、気分のようなものや、神秘主義者が体験する「宇宙との一体感」のような宇宙意識(コズミック・コンシャスネス)がこれにあたる。これにつづく最高段階が超意識である。

超意識 (Metaconsciousness) 記憶の知覚がきわめて逆説的になった状態。ここでは知覚する人が存在そのものへと没入することによって、自分のアイデンティティーの感覚をすべて失い、これまでになく自分が何であるかを意識するだけの状態になる。超意識の体験——すなわち中間世の直接の記憶を体験すること——はこの三次元世界のリアリティーを超えることであって、その結果、自分の存在理由を知り、また自分がカルマ、すなわち仏教でいう業とどのようにかかわりあっていているかを学ぶことなのである。この別世界はあまりにも異質な世界なので、言語を介して語ることができず、シンボルさえも、なおその本質をとらえることができない。

ホイットン博士はこれらの三つのちがったタイプの意識が共存できることに気がついた。たとえばひとりの人が夢を見て(解離意識)、主観的感情(情緒的意識)を経験し、そのあいだに中間世での記憶(超意識)をとりもどす、ということもできるわけである。

私たちが還っていく故郷

古代チベット人は、ひとことで生と死とのあいだの中間状態にぴったりのイメージをいいあらわした。バルドという言葉がそれで、文字どおりの意味は島と島をへだてる空間をあらわす。バルドは、島のように狭苦しい肉体を離れた魂にとって、きわめて重要なできごとに満ちた空間である。『バルド・ソドル』という八世紀に書かれた本がある。西洋では『チベットの死者の書』の題のほうが通りがいいこの本には、死んでから次にこの世に生まれるまでのあいだの意識の段階が描かれており、死の扉をこえた魂はつぎからつぎへと姿かたちのない意識上の体験に遭遇していく。何世代にもわたる体外離脱の旅の資料をもとに編纂され要約されたこの本は、いまでも臨終を

迎える人や死者のまくらもとで読み上げられるという。肉体を離れた魂が危険の待ち受けるバルドをうまく渡りおおせて、二度とこの世に生まれてこなくともすむようになると願うのだ。『チベットの死者の書』によると、中間世はこの期間を象徴する49日のあいだ続き、「クリア・ライト」につつまれて喜びにみちあふれるところから始まり、「すべての善行や悪行をありありと映しだす」カルマの鏡をのぞきこみながら取り調べをする冥界の王に出会うまで続く。

生と生のはざま

ホイットン博士が超意識(メタコンシャスネス)と名づけたこの至福の状態を定義すれば、いかなる存在状態をも超えたリアリティーを知覚することだといえる。これは夢をみている状態や体外離脱体験・前世の再体験などの、どの変成意識とも異なっている。超意識の状態とは、存在の本質と同化し、自分のアイデンティティ感を放棄し、その結果、一見矛盾するようだが実はこれまでになく自己というものをはっきり知るようになる状態である。超意識とは、身体の束縛から解放され、宇宙と一体となって、はてしなくひろがる雲の中の、ひとひらの雲になることなのだ。こういうと、それこそ雲をつかむような話になるかもしれないが、中間世がおとぎばなしの世界だといっているわけではない。その豊かさを味わった者は、自分のおとずれたのが究極のリアリティすなわち、生まれ変わって次の試練をうけるためにそこから船出していき、肉体が死ねばまたそこへ戻ってくる意識の世界なのだ、と知っている。

(1) この世を去る

みなそれぞれ死とはどんなものか考えているだろうが、各人の態度や人生の内容、魂の発達状態が、この世を去るときの体験内容にかなり影響を及ぼすことには気づいている者はほとんどいない。

肉から靈へといともかんたんに移行できるのは、気高い魂の衝動にしたがって性格形成をしつつ人生をおくった人々だ。彼らは肉体の崩壊をよろこび、今までじこめられていた身体からの解放を期待して明るい気持ちになる。発達をとげた人でもこれまでの人生が不完全だったと感じれば、バルドの崇高さに再びめぐりあう機会を望みながらも自分のいたらなさを嘆くだろう。人格の未発達の人がとる立場はたいてい次の二つ——死んでからどうなるかが心配で身体に残ろうと悪あがきするか、それとも健康に恵まれなかつた場合などはことに、その身体ができるだけ早く新しい「洋服」と取り替えようと早々にまた転生していくか——のうちのいずれかである。非業の死をとげたショックは当惑や怒り、自己憐憫、復讐などの欲望をひきおこすため、身体から抜けた魂をこの世にひきとめる原因となる。

(2) 輝かしい門出

目もくらまんばかりの光や圧倒的な明るさが中間世に入ったときの際立った特徴である。宇宙意識という大洋のように広大な体験とは、この光を知覚する作用のことであろう。この世のどんな幸せといえども、生と死の境界をこえた人すべてを飲み込むこの純粋の恍惚感に匹敵するものはない。存在するのはただ愛だけである。魂が、分かたれることのない、いちなる存在へとふたたび吸収されていくとき、強烈な恍惚感に、怖れや否定的なものは消え去ってしまう。

私たちは転生を終えるたびごとに、何度もこの輝かしいはじまりに迎えられる。そのはじまりはいつも完全な驚きとして感知される。視野をさえぎっていた目隠しが突然取り外され、私たちは歓喜にみちて悟る——宇宙が展開するありさまを、そして自分がこの宇宙のうちのどこに位置するのかを。人間がつぎつぎと転生をつづけていくのはなぜなのか、永遠の生命とは、輪廻のプロセスとは、といった謎もすらすらとかんたんに解けていく。

(3) 裁判官たち

審判劇のシンボルや性格は文化によって異なるが、審判が行なわれる目的はつねに同じで、魂がなしとげてきたことを評価し、将来どのような方向に進むかを計画することである。おしなべて人間はだれでも不完全な状態にあるから、このように事細かな取り調べを受けるのではないか、との予感がうまれるわけだ。

この非物質界の法廷の裁判官は高度に靈的発達をとげており、この世の転生のサイクルをすでに卒業してしまったかのように思われる。その人たちは目の前の人物に関して知るべきことは何でも直観的に知り、その人が今しがた終えてきたばかりの人生を評価するのを助けてくれる。場合によっては、つぎの転生についてこうしなさいと教えてくれることもある。

生と生のはざまに各人にとっての地獄があるとすれば、それは魂が反省のために自分自身を顧みる瞬間のことであろう。前世での失敗に対する後悔や罪悪感、自責の念が心の底から吐露され、そのため見るも無残なほど苦悶し、悲痛の涙にくれる。生きているときには、マイナスの行動も理由をつけて心のかたすみに追いやってしまうことができるし、言い訳だっていくらでもできる。ところが中間世では、このような行いをしたために生じた感情は生々しく、妥協を許さない。他人に与えた苦しみは、あたかも自分がその苦しみを受けるかのように身にしみる。しかし多分いちばん苦痛なのは、悔いあらためて過ちを正すにはもう遅いと悟るときだろう。前世へと通じるドアがかたく閉じられ、いままでの自分の行為や怠慢の結果が白日のもとにさらされる。ポーカーゲームの大詰めで持ち札全部を開けて見せるときのように、自分がだれで何なのか、説明を求められるのだ。他人の意見は役に立たず、問題にされるのは、私たち一人一人の誠実さ、私たちの内なる道徳性だけなのである。

(4) つぎの人生を計画する

ホイットン博士の研究でもっとも注目すべき点は、肉体に宿っていない状態のあいだに、多くの人々がつぎの人生を計画する事実がわかったことである。回顧の過程で探し出した自己に対する認識をもとに、魂はつぎの転生をどのようにするかを決める、きわめて重要な決断を下す。しかし魂はひとりで意志決定をするわけではない。決断するときには、裁判官たちの存在が大いにものをいう。裁判官たちは、魂にはどのようなカルマの負債があるのか、またどんな点を学ぶ必要があるのかをふまえて幅広い助言を与える。キリスト教の伝承によればイエス・キリストは、肉体をそなえた存在としては唯一の、両親を選択する特権を持つ者とされている。ところが、選択の道は万人に開かれており、来るべき人生を設定したり方向を定めたりするうえで、両親の選択が非常に重要だということがわかったのである。

(5) この世への帰還

最終決定をしてしまえば、あとはもう一度肉体へと下降するだけである。死とはまさに帰郷、すなわち闘いと苦しみから戻って憩う休息期間であり、誕生は熾烈な新しい仕事の第一日目だ、ということが超意識から明らかになっている。この世の試練を熱心に待ちのぞむ者もあるが、時間と空間のないバルドを捨てて物質界の拘束をうけるのに気が進まない者がほとんどである。

当然、この世への帰還を人一倍いやがる者もでてくる。ある男は、古代ギリシアで年端もない少年たちを働かせて虐待したことがあった。その彼は、こんどは自分が同性愛者としてこの世に戻って虐待を受けるのに怖れをなし、「男の慰み者になるだって！ それだけはかんべんしてくれ……」とトランス状態で悲鳴をあげた。

宇宙という教室

人間が成長していくうえで、進歩のきっかけとなる契機(メント)は不可欠である。契機がなければ学ぶこともないだろうし、転生の旅の途上に生じる無数の経験をつうじて、魂を前進させてくれるものもなくなってしまう。この推進力、起動力はすべて自分自身が生みだしたものである。これを、もうすっかり英語に根をおろしたサンスクリット語で、「カルマ」という。

カルマとは、個々の人みずからが、自分の欲求や態度や行動によって生涯から生涯へと設定してきたものである。カルマを受けいれると、人間は宇宙規模のチェスゲームでの単なるちっぽけなひとつのコマにすぎない、という考え方たはできなくなる。カルマを受け入れることは、世界は理にかなった公正さが支配する舞台である、と認めることもある。どの人の境遇もすべて、過去の行為の直接の結果として生じたものだとすれば、不公平や不平等、不運はありうるはずがない。カルマは自己責任を因果の法則にむすびつけるものである。あいつぐ人生で行なってきた所業によって、自分のつぎの人生と運命の外見や中身が決まっていくのだ。

もし私たちがつらい人生を堪え忍ばなければならないとしても、かならずしも前世で悪いことをしたためとはかぎらない。一定の試練をうけて、将来の仕事やりっぱな業績にそなえているかもしれないのだ。カルマのせいで、しなければならないことやかかわらねばならないことが生じはするが、カルマとは本質的には動機の存在を意味するものであり、ひいては自由意志行使せざるを得なくなるものなのだ。

人格を高めることのほか、技能や才能を向上させることも、カルマ的な成長のうちに含まれる。被験者が幾多の生涯をたどるうちに、どのようにして幼稚で自己中心的な人格から青年期の人格へ、ときには円熟した人格へとつづく長い道程を歩んでいくかをホイットン博士は知った。進歩はかならず意志の強さで決まる。また、いかにして才能が人生から人生へとひきつがれていくのかもわかった。今生での非凡な才能は、もとをたどればこれまでの転生で努力と専念をつみかさねてきた結果なのである。こうしてみると、偉大な政治家、音楽家、哲学者など世界の著名な人々は、過去世で徐々にその能力を身につけ、つちかってきており、ついに実力者としての生涯においてその能力が実を結んだ、と推測するのは理にかなうことである。逆に、リーダーシップに欠けていたり組織力のない人は、前世でも歴史上有名な指導者ではなかつたらしい、ということになる。

カルマは、人間の努力のどの領域にもあまねく働いている。ジョセフ・J・ウィードは、『神祕学の大師(マスター)の知恵』で、カルマの法則の働きにおいて、原因と結果がつぎのようにあらわれてくると述べている。

- ☆ 志を抱いたり望んだりすることは才能となる。
- ☆ くりかえし考えることは性癖になる。
- ☆ なしとげようとする意志は行動となる。
- ☆ 苦しい体験からは道義心が生まれる。
- ☆ 体験をくりかえせば知恵となる。

問題になるのは、カルマの曲がりくねって険しい道程が目的達成のための手段を提供してくれるとはいっても、魂の高次の目的を不明確にしてしまうおそれがあることだ。すべての個人の努力と人間相互の行動にはカルマがつきまとうが、カルマから生じる不協和音は、私たちの人生のバックグラウンド・ミュージックの主旋律——自分自身をもっとはっきりと知ろうとする魂の内なるあがき——を消してしまうことがある。べつのたとえ方をすれば、私たちはみな「進化」という広いハイウェイをドライブしているのだが、たえずカルマの交通渋滞がじゃまになって目的地がはっきり見えなくなってしまうようなものだ。中間世にいるときには、高次の目的はすぐにわかる。ところがこの世において定められた目的を全うしようと探求していく場合、そのあらわれ方は、幾多の生涯にわたっての「魂の探求」という形で、つぎのよう五つの段階を経て徐々に進んでいくように思われる。

- 1 唯物論の段階 物質的な幸福を追い求め、肉体的快楽の熱望に支配された状態。他人の感情にはほとんど関心がなく哲学的目标は皆無にひとしい。死後のことや、いかなる種類の究極の力も認めない。
- 2 迷信の段階 自分自身より偉大な力や実在があることにはじめて気づく。この全能の力について実質的には何も知らない。どうやらお守りや儀式などでしか制御できないものがあるらしい、と認めている。相変わらず唯物論的な生き方が支配的である。
- 3 根本主義の段階 神とか全能なるものについて、単純で迷信的で型にはまった考え方をし、それが生活の基盤となっている。儀式につきもののお祈りや、ある態度や行動を実践すれば、究極の報い——天国とか死後の地位——が保証されると信じている。ふつう、全能の神の怒りをなだめるべく、神にとりなしを願うことが指導者に要求される。指導者がターバンを巻いたヒンドゥー教の導師だろうとイエス・キリストと呼ばれようと問題ではない。この段階では基本となる信念を活用しこれを伝え、解釈する人物が必要とされる。
- 4 哲学の段階 自己の責任にめざめたばかり段階。宗教的信念を持ちつづけているはいるが、教義に依存するだけでは不十分だという認識がある。この段階の特徴は、生命を尊重し他人の信念に対して寛容であり、既成宗教の教義を深く理解していることである。
- 5 「迫害」の段階 人生の隠された意味とは何かを理解したいという強い願いから生じる、内なる緊張と怒りが頭をもたげる。存在の深い意味と目的に気づくが、どうすればそのような知識を得られるのか、はっきり確信がもてない。答えを探求するために広く本を読み、研鑽を深め、各種の神秘学や形而上学研のグループに加わったりすることが多い。「迫害」の名称はキリストの山上の垂訓、「義のために迫害される人は幸せである」(「マタイの福音書」5章10節)からとった。

これらの初心者の段階を無事に卒業すると、もうその人はしっかりと進歩の道を歩みだしている。進歩とは何本もの細い道が縦横に走っている高い山のようなもので、道の中には人通りの多いものもある。さまざまな道は、東側からは瞑想や超越瞑想を通じて上へと続き、西側からは神秘主義や形而上学を通じて上へと続く。

こうありたい、何がしたい、何がほしいといった執着が残るかぎり、カルマの因果関係は消えない。契機の法則がよくわかってくるにつれ、自分の動機や態度や行動がどのようにカルマの条件を作り上げていくかを次第にはっきりと予見できるようになる。

カルマの概念のもたらす結論としていちばん重要なのは、私たちのおかれた境遇は決して偶然のなせるわざによって決められたのではない、ということだ。この世で私たちはバルドで選んだことを体現している。私たちが、バルドの肉体をもたない状態にあって決定したことによって今生の境遇が決まり、潜在意識のありかたによって、良運や悪運がめぐってくる。カルマの法則が真実だと確信することはすなわち、たとえ現状がいかに困難でも、この現状にわが身をおいたのは自分自身なのだ、と認

めることなのだ。人はそれぞれ、試練や苦難の中にこそ学び成長するための最大の機会がある、と理解したうえでその試練や苦難を探しだしていくのである。